



新収作品：  
ハインリヒ・フュースリ  
《ガイド・ガヴァルカンティイの  
七霊に出会うテオドーレ》

## 昭和58年度の新収作品について

### On the New Acquisitions 1983

昭和58年度の新収作品はヨーハン・ハインリヒ・フュースリの絵画《グイド・カヴァルカンティの亡霊に会おうテオドーレ》(P. 1983-1)、モーリス・ドニの素描《アーサー王》(D・1983-1)と《レマン湖畔、トノン》(D・1983-2)、同じくドニのリトグラフ《泉に映る影》(G・1983-1)、ポール・シニャックのリトグラフ《サン=トロペの港》(G・1983-2)、ハンス・ホルバインの木版画《死と金持》(G・1983-3)およびプファルツ公ルプレヒトのメゾティント《洗礼者ヨハネの首を持つ死刑執行人》(G・1983-4)であって、絵画1、素描2、版画4、計7点である。

フュースリの絵画《グイド・カヴァルカンティの亡霊に会おうテオドーレ》は今年度の特別展として開催した「ハインリヒ・フュースリ展」を機会に購入したもので、同展に出品された画家の代表作《夢魔》(デトロイト美術研究所, 1781~82年頃)に次いで制作された文字通りの大作であり、近年まで注文者オーフォード卿由縁のホートン・ホール城に伝世したものである。主題はドライデンが翻案した『デカメロン』中の一物語に拠っており、文学の絵画化というフュースリの強い志向を、古代彫刻またはミケランジェロ作品の研究から習得した動勢のある形体をもって十二分に発揮した傑作である。当館にこれまで全く欠けていた初期ロマン派の異色作を持ち得たことを大きな喜びとしたい。

ドニの素描2点とプファルツ公ルプレヒトのメゾティント版画とは当館協力会の寄贈になるもので、一は当館にすでに多いドニ作品をさらに充実させ、他は近年鋭意収集に努めつつある版画部門にメゾティント技法史上の記念碑的作品を齎した。またドニとシニャックのリトグラフは何れも名作として知られるもので、ステート、保存ともに申分がない。

作品の購入は当館に課せられた最大の使命であり、我々は松方コレクションの趣旨を継いで19世紀フランス美術の分野の補強を計る一方で、そこから溯って西洋近世近代美術作品の系統的な収集を基本方針としている。その道は峻しくかつ遠いが、本年度もまた着実な一歩を進め得たことを悦ぶものである。

館長 前川誠郎

## I. 絵画

ヨーハン・ハインリヒ・フュースリ

《グイド・カヴァルカンティの亡霊に会うテオドーレ》

本作品については、「ハインリヒ・フュースリ展」（昭和58年，国立西洋美術館）のカタログに掲載された論文「《グイド・カヴァルカンティの亡霊に会うテオドーレ》についての諸考察」（執筆，有川治男）および，本年報に掲載したその英訳を参照されたい。

## II. 版画，素描

モーリス・ドニ

《アーサー王》

《レマン湖畔，トノン》

《泉に映る影》

モーリス・ドニは，ボナール，ヴェイヤール，ルーセルらと共に，ナビ派の代表的画家として19世紀末から20世紀前半にかけて活躍した。印象派の平明な自然主義に飽きたらず，主題性の復活とより絵画的な表現を求めて結成されたこのナビ（預言者）のグループは，最初はゴーガンの強い影響下にきわめて象徴主義の色濃い作品を制作した。

中世より伝わる聖杯伝説に取材したドニのペンによる素描《アーサー王》は，古い説話や民間伝承に惹かれていたドニが好んだ主題のひとつであり，きわめて装飾的な線による描写に特徴がある。一方，リトグラフ《泉に映る影》は淡い色彩の中に夢想的な雰囲気を漂わせ，なにげない日常的光景の中に神秘を見い出そうとしたナビ派の作風がよく表われた作品と言えよう。版画というジャンルに深い関心を抱き続けたドニは，終生木版やリトグラフによる作品を制作し続けた。その中でもこの作品は，著名な「愛」の連作（1892—99年）とほぼ同じ時期に手がけられた代表作のひとつである。この作品はヴォラールが刊行した数人の作家による32枚のリトグラフ・アルバム中の一葉であるが，市販品とはステートが異なり，番号も付けられていないことから試刷りと推定される。鉛筆と水彩で描かれた《レマン湖畔，トノン》は画家の最晩年の作で，スイスのレマン湖を南岸のフランス側の町トノンからスケッチしたものである。

ポール・シニャック

《サン＝トロベの港》

1892年，シニャックは南仏サン＝トロベを訪ね，以後，第一次大戦が始まるまで毎

年、一年の大半を同地で過ごした。彼はこの港町で多くの水彩画を描き、また、それらをもとにして多数のリトグラフや油彩画を制作した。彼のカラー・リトグラフは、新印象主義の点描法が版画にも応用されたこと示す貴重な作例であり、このような点描版画はシニャック自身によって創案されたものである。

本作品には3種のステートが知られ、これは20枚刷られた第二ステートの中の一葉である。

プファルツ公ルブレヒト

《洗礼者ヨハネの首を持つ死刑執行人》

17世紀における銅版画技法の刷新は、同時代の絵画様式の趨勢と深い関連をもつ。メゾティントは、この世紀の前半に、カッセルなどドイツの宮廷に仕えたユトレヒト出身の軍人ルートヴィヒ・フォン・ジーゲン Ludwig von Siegen (1609—1680頃)によって発明された技法であるが、それが絵画における明暗法を版画で再現するためのものであったことは疑いない。16世紀の銅版画の主流を占めていたエングレーヴィングやエッチングが線を陰刻するのに対して、ルーレットと呼ばれる道具であらかじめ銅版にこまかい傷をつけることによって画面に黒い地を作るメゾティントは、何よりも明暗の微妙な諧調を面として表現するのに適していたからである。ジーゲンは1640年代の前半オランダに数年滞在したが、同じく明暗の表現を重視した版画家であるとはいえ、エッチングの名手レンブラントには何の影響も及ぼさなかった。彼が発明したメゾティントを継承し発展させたのは、やはりアマチュアであったプファルツ公ルブレヒトである。

ルブレヒト（英名ルパート）はプファルツ選帝公フリードリヒ五世の子としてブラハに生まれたが、母方の祖父がイギリス国王ジェームズ一世、叔父が同国王チャールズ一世というようにステュアート王朝と深い血縁関係を持っていたため、彼にとって活動の舞台となったのはむしろイギリスであった。彼は三十年戦争では皇帝軍と戦って獄につながれ、清教徒革命（1642年）に続くイギリスの内戦では国王軍の指令官となり、第二次英蘭戦争（1672年）では英国艦隊の副提督を務めるなど、軍人あるいは政治家として華々しい生涯を送った。

オランダで育ったルブレヒトは若い頃から美術に深い関心を抱いていたが、本格的に版画制作に取り組むようになったのは、イギリスの内戦で清教徒軍に破れ、大陸に亡命していた時期のことである。初めはもっぱらエッチングを用いていたが、1654年頃ブリュッセルでジーゲンに出会ったのを契機にメゾティント技法を習得し、現在判明しているものだけでも、この技法による版画を約10種残している。王政復古（1660

年)によってイギリスに戻り、再び要職を務めるようになってからは、彼自身は版画制作から遠ざかったが、コレクターであったジョン・イヴリンやウィリアム・シャーウィンらにメゾティントの技法を教え、イギリスにおけるメゾティント版画の発展の基礎を築いた。

本作品は数少ないルブレヒトの版画のなかでも代表作の一つとして知られる。背景および衣服の濃淡はメゾティントによってみごとに表現され、特にハイライトの部分はこの技法による版面のこまかい傷を掻き取るなど、かなり習熟した技法を示す。剣の上には王冠と Rp. f (?) のモノグラム、1658 の年記、さらに画面下辺の手摺りに左から右へ Sp. In. RVP. P. FECIT FRA (N)COFURTI・ANO・1658 M. APR と刻まれていることから、スパニョレット(小柄なスペイン人)の名で知られたホセー・デ・リベーラの油彩画を模して、1658年にプファルツ公ルブレヒトがフランクフルトで制作したことがわかる。メゾティントに手を染めてからほど遠からぬ時期に素人ばなれした技量を見せていることから、制作にあたっては彼の助手を務めていたオランダの職業版画家ヴァレラント・ヴェヤン Wallerant Vaillant (1623—1677)の協力があつたとする説もある(ハインド)。

本作品は、アンドレセンによれば第二ステート、ハインドによれば第三ステートに属するとのことであるが、いずれにせよ本作品に先立って、下辺の手摺りに文字の刻まれていない版画が作られたことが知られている(ブリティッシュ・ミュージアム等所蔵)。また、のちにルブレヒトは、イブリンの著書『彫刻』(1662年)の挿絵としてこの死刑執行人の頭部をそのまま使って別のメゾティント版画を制作した。

なお、この版画の原画となった油彩作品は現在ミュンヘンのアルテ・ピナコテークにあるが(Inv. No. 969)、今日ではリベーラの後継者、それもフランス出身の画家の作とする意見が有力である。版画はこの原画と左右の向きこそ逆転しているが、各モチーフは細部に至るまで正確に写しとられている。

ハンス・ホルバイン(子)

《死と金持》——連作「死の舞踏」より

ドイツ・ルネッサンスの生んだ国際的画家ハンス・ホルバイン(子)は、肖像画家として余りに有名であるが、そのほか、「旧約聖書挿絵」「黙示録挿絵」「死のアルファベット」など、木版画のための下絵画家としても活躍した。しかし特に代表作として知られるのは、連作「死の舞踏」である。

この版画集は1538年、フランスのリヨンの版元メルキオール・トレクセルとガスパール・トレクセルの兄弟によって初めて公開された。初版は41枚の木版画による挿絵

の形式をとり、各版画の上方にラテン語の聖書からの引用、下方にフランス語の四行詩が印刷され、原題は、*Les simulacres et historiees faces de la morte, autant elegammet pourtraictes, que artificiellement imaginées*（巧妙に案出され、かつ優雅に描出された死のイメージと挿絵入りの死の諸相）であった。

序文には、「原作者は久しい以前に故人となった木版彫師である」と記され、1526年に歿したハンス・リュッツェルブルガーについて言及している。トルクセルはリュッツェルブルガーの死後ただちにパーゼルの裁判所に訴えて、同年6月23日に「前金払いで注文してあった」木版画の版木を入手していたが、それが出版されたのは実に12年後のことであった。

その後、版木と共に入手したホルバインの下絵を他の版画家に彫らせた10枚の版画、さらにホルバインとは無関係の子供を描いた7枚の木版画が加えられ、1538年から1562年の間に11もの版が重ねられた。

初版にこそホルバインの名は現われていないが、二版の序文には下絵作者としてホルバインの名が記されている。また、彼の他の版画作品との様式上の類似から、「死の舞踏」の下絵を描いたのがホルバインであることは間違いない。版元トルクセルがいつ彫師リュッツェルブルガーと契約したのか、そしてこの彫師がいつホルバインに下絵の制作を依頼したのか、これらの点は判然としないが、リュッツェルブルガーがパーゼルに定住したのが1522年、そして彼がパーゼルで歿し、ホルバインが英国へ赴いたのが1526年であることから、この4年足らずの期間に両者が協力して「黙示録挿絵」、各種のイニシアル絵、そして「死の舞踏」を制作したものと考えられる。さらに、「死の舞踏」の原型ともいべきイニシアル絵、「死のアルファベット」が1524年8月以前に出版されているので、「死の舞踏」はそれに引続いて制作されたものと推定される。

「死の舞踏」という主題は、ベストが猛威をふるった15世紀以来ヨーロッパ各地の教会や墓地の壁画などに頻繁に描かれるようになり、そこを訪れる人々に死の恐しさを教え諭す教訓的意味をもっていた。パーゼルでも当時、「死の舞踏」を描いた二種の作品が存在していたことが知られている。しかしホルバインは、このような「死の舞踏」の思想に依拠しつつも、表現の対象を、人間を襲う「死」から、むしろ死に襲われる「人間」に向けることによって、日常生活のなかで突然死の局面に立たされた人間の姿を描こうとしている。登場人物も教皇から庶民まであらゆる階層にわたり、それもたとえば、司教に化けた死が祈禱書をかぎす肥った修道院長を拉致する場面を描くなど、人の世の愚かさに対する諷刺がホルバインの関心の対象になっている。人間社会に対するこのような深い洞察力は偉大な人文主義者エラスムスと親交のあったホ

ルバインにふさわしいものであったと言えよう。また、出版が遅れ、当時宮廷肖像画家として絶頂を究めていたホルバインの名が初版に記されなかった原因をこの鋭い批判精神と作者の警戒心に求めることも、決して不可能ではないだろう。

本作品《死と金持》は、版木がバーゼルからリヨンへ移される前に作成された二種の刷り（公刊を目的としたのであろうが実現しなかった）の一方に属するもので、題辞はゴシック体のドイツ語で記されている（他方の刷りはイタリック体のドイツ語の題辞を持つ）。ホルバインのすべての版画作品に共通することであるが、この作品の場合も下絵は現存しない。

裏面に、鷲をとりかこむ NATIONAL GALLERY OF ART の円型の印と DUPLICATE の印があることから、重複作品としてワシントン、ナショナル・ギャラリーから放出された作品であることがわかる。マージン（周囲の余白）を欠いているが、保存状態は良好である。